ぶどうの木

第 21 号

基督伝道隊　八幡前田教会
大濠公園教会
戸畑教会

目次

巻頭言……榎本利三郎……1
洗礼を受けるにあたって……貞　頼子……2
私の信仰告白……花田　仁……3
救われた喜び……山中　良美……4
かんしゃ……畠山　英子……9
橈骨神経麻痺……伊規須太郎……19
我が思い出（三）……鈴木　一幹……22
新緑の旅……福岡大濠公園教会婦人会……30
ホスピス……久保田宮子……32
収穫（いやし主に支えられて）……緒方とみ子……33
祈り……広田　寿……36
聖書味読……伊規須泰子……37

巻頭言

榎本　利三郎

すべて良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶ。

（マタイ七・一七）

今年は記録的な高温と晴天続きで、暑さがこたえ、水不足に草木もしおれて、庭のさんご樹も成長が止ったままです。然し先日の夏期学校で食べた西瓜は味が良く、桃も梨も粒は小さくても素晴らしい味で、毎日が楽しく成ります。

此の一年間、皆様一人一人問題はいろいろありますが、此の夏日の様な試練も『主は王と成られた。世界は堅く立って動かされることはない。』と聖言の水に潤され、主に在る芳醇な味の実を沢山結んで『ぶどうの木二一号』が出来ました。

此の果実を、感謝・賛美と共に主に献げましょう。

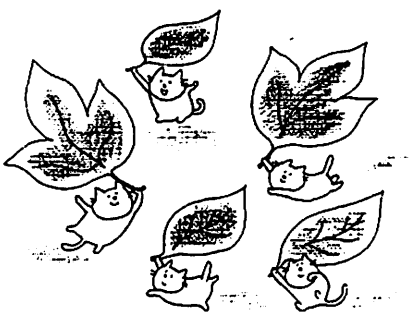
洗礼を受けるにあたって

貞　頼　子

両親ともクリスチャンという環境で育った私は、幼い頃から教会へ通っていました。目には見えないけれど、神様はいらっしゃる、と脳裏に入り込んでいました。しかし、神様を知っている、ただそれだけのことでした。そういう中、神様は私に多くの苦しみを与えられたのです。今考えると、本当に取るに足らないことですが、自分が何歳になったかも忘れてしまうように長く感じた日々でした。自分が何をしたいのかも分からないまま、人に流され、自分を見失うような状況へ追い込まれたのです。私は何のために生きているのか、もうわけがわからなくなり、ノイローゼ状態になっていました。誰とも話したくない。私という存在がなくなればいい。あらゆることを思い悩むことに疲れ果て、私はあえぐように神様に助けを求めたのです。

「苦しみにあっことは、わたしに良い事です。これによってわたしはあなたのおきてを学ぶことができました。」（詩篇一一九・七一）。これは私にとって、しかり、といわんばかりの聖言です。あらゆる試練を通して、自分という人間がどんなに弱い者であるかを教えてくださり、謙虚になる姿勢をつくって下さいました。しかも、神様を離れ、憤りと貪りのかたまりのような者であったにもかかわらず…。

そして、特に心の支えとなった「わたしたちは、生きるのも主のために生き、死ぬのも主のために死ぬ。だから、生きるにしても死ぬにしても、わたしたちは主のものなのである。」（ローマ一四・八）の聖言を与えて下さいました。わたしは主のもの。今まで自分が自分のものと思っていたから、試練や悲しみを苦痛に思うのだと気づかせて頂いたのです。私は神様の前に罪人であり、イエス様が十字架に架かって、死んでくださいました。すべて私の罪を帳消しにしてくださるために…。こんなに恵み深い神様の憐れみに、私は涙がでそうなくらい感謝でいっぱいです。



私の信仰告白

花田　仁

わたしはクリスチャンホームに生まれ、三才で幼児洗礼をうけました。しかし、それは私の信仰によってではなく、両親の信仰によるものでした。両親の信仰のもとで、毎週教会に来て、教会学校に出席して、神様のお話を聞いていましたから、素直に神様がいらっしゃることを知っていました。ですから、神様は出来ないことのないお方と信じ、困った時や病気の時にお祈りをしていました。そして、願いがかなえられればそれでおしまい、という状態でした。

五年前、神様のお恵みによって、中学校の入試で泰星中学校へ入学することが出来ました。そこはキリスト教の学校で宗教の時間があり、聖書を読む機会が与えられました。中学一年の二月に妹が天に召されました。その時私は、どうしても妹が死んだということを認めたくなかったのです。ひとまず記憶を封じ込めて、「妹は最初からいなかったのだ。私は夢をみていたのだ」、と自分に言い聞かせることにしました。ある時、宗教の時間に「私たちはどこから来て、どこへ行くのか」、と言うテーマで話し合いました。その時紹介された哲学者サルトルの言葉に、「神は人間を束縛するもの。そもそも人間の存在には全く意味がない。自分でその意味を作り出していかなければいけない」という言葉がありました。私は、「妹は無意味に生きて、無意味に死んでいくのだろうか」と深い疑問を感じました。その上、いつ私が神に束縛されたのだろうか、お祈りすることや毎週教会に行くことがそうなのだろうか、と疑問に思いました。

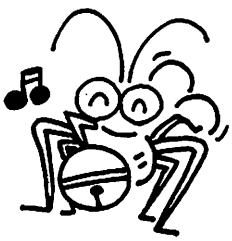
三重の障害を持っていたヘレン・ケラーの、「見たり触ったり出来なくても、心に感じることのできる世界で最も美しいものがある」という言葉を聞いて、体に障害がないとか経済や物に不自由しないことが自由ということではなく、目に見えないものに、目に見えない所に自由と幸いがある事を確信しました。聖書の言葉に「私たちは、見えるものにではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」とあります。妹は自分の目には見えないものになってはいるけれども、永遠に続くものとして、神様のもとにあることが信じられます。

世の中に不正や悪、偽り、殺人、戦争などがあって、神様を否定する考えのあることを聞いて、それはおかしいと思いながら、自分の中にもそうやって神様を疑う思いがあることに気づかされました。しかし、悪がはびこるのは、人間が、つまり、

私自身が神様を否定して、勝手に生きている結果である事を悟らされました。その時以来、真剣に神様を信じたいと願いました。

また、授業中にある生徒が「キリストって本当によみがえられたのですか」と尋ねた時、担当の先生は、「キリストがよみがえられたことを信じるのがキリスト教なのだ」と答えられました。それを聞きつつ、自分は長年神様を信じてきたけれども、本当に心からキリストのよみがえりを信じているのだろうか、と問われました。その時、新しくハッキリと、イエス様が私の身勝手な生活のゆえに死んで、よみがえってくださったお方なのだ、と確信を与えられました。ヨハネによる福音書の「あなたは私に従ってきなさい」との聖言が、私に与えられた言葉です。よみがえってくださったイエス様を信じて、生涯、お従いしていこうと決心しています。

弱い小さな者ですから、皆さんのお祈りをお願いします。



救われた喜び

山中良美

私は長崎県平戸市の根獅子という小さな町で、三人弟妹の長女として生まれました。かくれキリシタンの町で、弾圧のあった時代には海が血で赤く染まる程たくさんの人が処刑されたそうです。小学校の裏には海岸に流れ着いた六人の殉教者の墓がありました。町の多くの家で、今もその信仰が生きていて、一年に一度、行事のようなものが行われています。

平戸には、カトリック教会がたくさんあり、中学生の頃は多くのカトリック信者の友達がいました。私も白いベールや十字をきる姿に憧れていました。興味津津で覗く教会は、色とりどり、静かに光るステンド・グラス、白いマリア像、十字架につけられたイエス様、うす暗いのに静かな会堂、でも怖さを感じなかったのを思い出します。

私の父は漁師で、海で素潜りをする一方、農業もしていました。母は日雇いの仕事などに行っていました。父は酒が好きで、私が中学生の頃はアルコール中毒になり、幻覚症状が出て、人が来ているとか、虫がいるとか、夜中に窓を開けて誰もいないのに怒鳴ったりするようになりました。酒を飲んで道端に倒れ、

救急車で運ばれて入退院の繰り返しでした。母はいつも「離婚する」、「離婚する」と口癖のように言っていました。

小学生の頃から中学生の頃まで、夜中に母と子供三人で夜道を懐中電灯を灯して、七キロ程の道を、何度母の実家へと向かったことでしょう。いつもいつもでは悪いからと、古い車庫のビニールにくるまっていたこともありました。よくあたるおかみさまがいると聞けば、あちらこちらに出かけて行き、拝んで貰って帰ってきていました。一家の稼ぎ手の父の収入も入らず、入院費ばかりがかさみ、わが家は借金の山となりました。母はありとあらゆる所に行き、頭を下げてお金を借りて来ました。水道代が払えず水道が止められたり、電話代が払えず電話が止められたり、税金が払えず差押えの紙が来たりということが度々でした。お金の返済の時期が来ると毎日のように電話がかかっていました。山や田んぼを売っても追いつかない。お金がなくて何度悔しい思いをしたことでしょう。目が腫れあがるほど、どれほど泣いたことでしょう。

どうして私はこんな家に生まれたのだろう。何度もそう思っていました。こんな家に私を生まなければよかったんだと、母にたびたび当たりました。家庭円満で、普通の暮らしをしている友達がうらやましかった。お金持ちでなくていいから、ただ普通の生活がしたかった。おこづかいなどとうていありません。高校に入ってからは毎朝新聞配達をして稼ぎました。けれど、ただ自分のためだけでした。母の口癖は「子供たちだけは立派な人になって、人を見返して欲しい」という願いでした。自分たちは貧乏で人にばかにされているから、せめて子供だけはと、そろばんを習わせてくれ、高校も奨学金を借りながら出ることができました。それでも父と喧嘩しては物にあたりちらす母が嫌いで、私はいつも反抗していました。小さい時から、いつも罵り合ったり、叩いたり、蹴ったり、喧嘩ばかりの家庭でした。母の苦労を何度も見ているのに、私は自分の幸せや人の目しか考えることが出来ませんでした。母をいたわる気持ちさえありませんでした。ありとあらゆる人、母さえも父を厄介者扱いでした。けれども、私はどうしても父が嫌いになれませんでした。酒を飲まない時の父はとても優しく、穏やかな人だったからです。

高校を卒業して、関東にある東芝に就職した時、父と母はとても喜びました。親の望む生き方なんかしないと思っていた私も、心のどこかで親が喜んでくれることを願っていたのかもしれません。会社では人間関係も問題なく、責任ある仕事も任されて恵まれていました。けれど、私がずっと夢見て追いつづけていたのは、華やかで目立つ生き方でした。自分を表現する生き方こそが素晴らしいと思っていました。ですから、私はこの

ままでいいのだろうかと思うようになりました。自分はこんな生き方をするはずではなかった、もっと違う生き方のはずだと、気持ちばかりあせっていました。それでも、何も新しく始めることはできず、いつものように会社に通う私でした。

働きだして一年程たった時、毎朝、川岸をジョギングするようになりました。英会話、生け花、空手、ヨガ、バスケット、いろいろやりました。バスケットのシュートを千本打ちおわったら何かつかめるかも、と思いたち、八百本うって虚しくなりました。二〇キロマラソンを完走したら、何か得られるかもと完走したけれども、期待外れでした。憧れていた北海道に一人でふらっと出かけ、時刻表を片手に回ったけれど、何か違う。何も確信が得られない。私は孤独でした。誰にも私の心は分からない。誰一人として自分を理解してくれる人はいない。仕事から帰って、夜中までじっと自分を見つめる時、考えの行き着く先は、「人間って一体なんだろう。私は何のために生きているのだろう」と、そこにぶつかってそこから先は何も見えませんでした。私は自分のしていることが良い事か、悪い事かさえも分からなくなっていました。嘘をつき、人をだまし、顔では笑顔をつくりながら、心の中は妬みでいっぱいでした。人の幸せより、自分の幸せ。誰かが幸せになるためには誰かがきずつくものだと、傲慢でした。私は感情のままに生きていました。けれども、その身勝手な生活とは裏腹に、心は虚しかった。いろいろな出来事と、心の葛藤の繰り返しで、私は自分が自分でわからなくなっていました。自分の感情を抱えていることに、もう限界がきていました。

入社して二年三ヵ月たった時、会社を辞めました。親戚の家に住み、二ヵ月程アルバイトをして過ごしました。さあ、新しくやり直そうと思い立ったものの、それにも望みがもてなくなった時、これからどうやって生きていこう、これからどうしようと、途方にくれました。

いったい、今まで私は何をやっていたのでしょう。中学、高校と、優等生でスポーツ万能、生徒会副会長、部活のキャプテン。作文も絵も上手でいつも入選。顔もスタイルもいいねと、ちやほやされ、真面目で優しくて性格がいいと、友達や先生の評判もいい。けれども、本当の私は違いました。ただそうして作り上げられた姿から外れぬようにと、人目ばかりを気にして生きていました。心の中は醜く、淫らな自分に苦しみながら、また片方では「私は人とは違う生き方をするんだ」と、意気込み、つっぱっていました。自分の事だけを思い続けてきた心は、満足とは程遠く、虚しさと未練だけでした。今、生きているのは生活するためだと、仕方なしの毎日でした。

これまで何度か頭をかすめていた看護婦になる道へと、まる

で他人事のように進み、去年の八月に福岡に来ました。病院で働くようになりましたが、毎日毎日、洗濯ばかりさせられ、喜びも何もありませんでした。

病院で働いているとき、いつも聞こえてくる教会の鐘が気になり、ある日、その教会を訪ねて出かけました。その教会を見つけることができず、帰っている途中、電柱にかかれた教会の道案内を目にしました。そうして、この大濠の教会へとたどり着きました。中高生の頃見たカトリック教会とはまるで違っていて、あまりの質素さにがっかりしました。建物とイメージだけしか期待していなかったからだと思います。

次の日に初めて礼拝に出て、讃美歌をまねて歌っていた時、涙があふれてきました。何故だか分かりません。でも、肩の荷が下りるような思いでした。さっそく聖書を買い求め、読みはじめました。夜がふけるまで、テレビもみずに読み続けました。心は飢えていました。心に重くのしかかっているものから逃れて、楽になりたくて必死でした。出られる集会には努めて出席し、先生にいろいろ聞くけれどわからない。罪も愛もわからない。なぜわからないのだろう、どうしてわからないのだろうと、あせるばかりでした。でも、いつのまにか、私の中で神様は生きておられました。遠くではあったけれども、神様の存在を感じることができるようになっていました。

しかし、どうしてもイエス様のことはわからぬままです。ある日の伝道集会で、神様の愛とイエス様の十字架の話があった時、私には愛がわからない、イエス様がわからないと、切羽詰まった思いで、涙が出そうになりました。自転車で夜道を帰る途中、なぜわからないのだろう、どうしてわからないのだろうと、涙が溢れ出て止まりません。声をあげながら泣いて帰りました。泣きながら部屋につき、森住ゆきさんの『アメイジング・グレイス』という本を見ていたとき、一つの言葉が心の中にとびこんで来ました。「愛のない者には神はわかりません。なぜなら、神は愛だからです。」ああ、私には愛がなかった、愛がなかったんだ。私は愛のない人間だったんだ。神様の愛などわかるはずがない。ただそのことにまた涙が出てきて止まりませんでした。私はどれほど自分を取り繕って生きてきた事でしょう。どれほど自分を良い人間と思って生きていたのでしょう。目を覚まされる思いでした。病院での新しい仕事、新しい人間関係の中で疲れ、つまずいていました。もうお手上げでした。自分の考えではどうすることもできませんでした。もう降参でした。受洗を願い出ました。

そうして、一ヵ月たち、イースター礼拝を迎えました。説教をきいていた時、グッド・ニュースに書かれていた聖書の言葉が心の中を支配しました。取税人ザアカイのところでした。

「ザアカイよ、急いでおりてきなさい。」みるみるうちに、頭の中にはその光景が浮かんでいました。いちじくくわの木に登り、眺めているのは私でした。実にイエス様が私に声をかけておられるのです。何度も、「ザアカイよ、降りてきなさい、ザアカイよ、降りてきなさい。信じない者にならないで、信じる者になりなさい」と。まぼろしを見るような驚きでした。涙は溢れてとまりません。心に光がさして来ました。心を頑にしつづけていた私に、なおも信じえない私に、「あなたはわたしを見たので信じたのか、見ないで信じる者は幸いである」と、イエス様が姿を現して下さいました。「人の子が来たのは、失われたものをたずねだして、救うためである。」心が迷いだし、さまよいつづけた私に語られたお言葉でした。私は木から降りました。私はやっと、ゆるぐことのない、確かなたった一つの本当のものを得ることができました。人が立ち返るべきところに帰ることができました。私からでたものは何一つありません。教会への導きも、救いを求める心も、信じる信仰も、全て神様からいただきました。

自分の罪を感じながらも、罪人のかしらと認められない、自分は大罪人とは思えない、ここに罪がありました。「父よ彼らをおゆるしください。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです」と、イエス様が架けられたあの十字架は私のこの罪を許さんためと立てられたものでした。私はいま、イエス様と共に十字架に死にます。苦しみ続けてきた自我と罪、自分だけのために生きてきた古き自分に死ぬことができる喜びでいっぱいです。「だれでも、キリストにあるならば、その人は新しく造られたものである。古いものはすぎさった。見よ、全てが新しくなったのである。」新しい命の恵みを心から感謝します。

『信ずること

キリストの名を呼ぶこと

人を許し、できるかぎり愛すること

これを私の一番よい仕事としたい』

八木重吉さんのうたったこの詩が今の私の心そのままの祈りです。許されたように、人を許し、愛されているように、心から人を愛していくこと。いのちの聖言を光とし、力とし、望みとして歩みたいと願っています。

（一九九四年　五月一五日洗礼式での信仰告白）

「かんしゃ」

畠山　英子

「わたしは彼の道を見た。わたしは彼をいやし、また彼を導き、慰めをもって彼に報い、悲しめる者のために、くちびるの実を造ろう。」（イザヤ五七・一八）

一、癌の爆弾を抱えながら

◆この聖句が御礼拝のなかで語られた時、心に深く響き、大変思い出され、頭に浮んでばかりおりました。

畠山正三の首筋に出ました淋巴癌（ぶどうの木二〇号に記載）については、先生はじめ教会の皆様のお祈りに支えられて、平成三年九月より四年の二月まで入院、そのあとは自分の運転で二週間毎に検診に通い、主治医の「異常なし」の言葉にひとまず元気と安心の日々を送り、野に山に趣味の苔を採取に行き、帰りには温泉に立ち寄るなど、首筋の治療に過しましたが、（いつ再発するかわからぬ。三年、或いは五年という癌の期限の爆弾を抱えている）と言う恐怖は頭から離れる事はなかった様でした。

気は短くなるし、私に対して怒りっぽくなりました。夜は、ひかえておりました睡眠薬を半個から一個服用しなくては眠れなくなって来ました。それでも持ち前の強気を常に口に出し、神様のお話などはすぐ打ち消す始末です。そして自力本願のスローガンを掲げ、「俺は他力本願ではないぞ」と元気を出し、反対の鉾先は常に私の信じている主イエス様を指しておりました。

入院期間（平成三年九月－平成四年二月）の中頃から、だんだん主イエス様に反対する態度が露骨に出だしました。

二、戦いの連続

◆伊規須先生は私に言われました。「畠山さんにお話しても聞かれないなら、せめてお祈りを一緒にしてあげなさい。主は御言葉に、『汝の道をみた』と私共に仰せられます」と。それでも私はなかなか畠山にはお祈りが出来ない、お話が出来ないのです。

私は毎朝一つの仕事が終えますと、一室で一日一章ずつ聖書を読んでお祈りを致し、それから一日の商売が始まるのですが、畠山はバタバタと廊下をやって来てはガラッと戸をあける、「いつまで宗教の勉強をしているのか！いい加減にしないか。宗教にこってしまうとろくな事はないぞ。今何時と思っているのか。早く仕事のだんどりをしないか!!」と乱暴な言葉を浴び

せかけます。

あげくの果には、私が部屋を出た間に、聖書を袋に詰めてどこかへ隠してしまったのです。仕事部屋兼お祈りの部屋に、今年たまわった聖句を大きく書いて貼っておりますと、「仕事部屋にそんなものはかけるな」と、はずさせてしまいます。信仰の戦いは常でありましたが、益々反対の戦いを始めました。私は祈りました。

三、祈りつづける

◆「主よ、私はこの畠山正三と言う主人を御救に導く為に遣わされたのでございますが、もうどうする事も出来ません。私にはそれ程の強い信仰もなく、此の人に立ち向って行く勇気はありません。主の事をお話ししても聞く耳を持ちません。人間的には割合情のある人ですが、幼い時より悪がきで、性格も弱い半面、向う意気荒く、おまけにお酒が入ると乱暴を働くし、いつも大将になりたい、一寸気に入らないと大変な所がありましたのは主イエス様がよく御存知です。どうか、私には出来ませんが、聖書にある通り、死人を活きかえらせ、水をぶどう酒に変え、波の上を歩いて救いに来られた御力によって彼をお救い下さい。もう私は駄目です。助けて下さい」水曜（祈祷）会、金曜会、すべて名前を出してお祈りさせて頂きました。

平成四年も再発する事なく無事に過ごさせて頂きました。息子の結婚相手もきまり、新年聖会には一緒に出させて頂き、喜びの中に過ぎました。

四、癌が正体を現す

◆五年の一月もなかばです。食物が二、三度食道につまる様な事がありましたので、検診はいつもですが、もう一度調べて頂きました。するとすぐ再入院です。私は主治医に呼ばれました。「畠山さん、癌が出ました。食道癌です。珍しいケースで、畠山さんは結果（リンパ）の方が先に出ていたのですが、今度ははっきり食道に出ました。此れは今までのデーターによると約一年の余命です」。私は全身がガーンと叩かれた様になりました。

畠山は、病室も決っていましたが、私が行きますと、「主治医は何と言っていたか。本当の事を言ってくれ」、さすがに動揺の色は隠せませんでした。私はつとめて明るく答えました。「手術のあとの筋が中の方で腫れているので、少し入院をして調べようと言っていましたよ、大丈夫よ。何度も死に損ねたあなただからまだ元気ね。神様、イエス様が仰せられています、『正三よ、まだ一つ大きな仕事が残っているぞ』と」……その仕事とは神様を信ずる事ですと、口まで出かかりましたが、

又祈りました。毎日々々御救いにあずかるまで祈りました。

「さて、もう一度別荘に入ったつもりで養生をする事にしよう」と苦笑い、気を取り直して入院生活に入りました。

五、掛け替えのない時

◆五月には息子の結婚式も、神の恵みの中にすませて頂き、何も心配はなくなりましたが、抗癌剤投与の為に段々と体力がなくなりやせて来ました。しかし紫川べりを散歩したり、公園に行ったりしてつとめて明るく病院生活を送りました。そのため、伊規須先生がお出で下さっても、病室にいたためしがなく、先生をお待たせしました。

金、土、日は外泊（帰宅）して、庭にかがんで苔の手入れをしていましたが、その姿はやせて小さくなっているのに心がつまりました。

平成五年一月より一〇月二七日迄は、「今は恵みの時、救の日なり」此の聖言通り、彼にとってはかけがえのない、此の地上で神より与えられた尊い日々であったと、私はつくづく思うのでございます。そして自分の今を考えました。私も今だと思いました。

六、毎年の神棚騒動

◆「我らに己が日を数える事を教えて、知恵の心を得させて下さい」。この聖句は礼拝、集会の時、先生からよく聞きました。神様がこの聖言を私の心に常に仰せられているとうけとめました。このあと畠山は一〇月二七日には主イエス様のみもとへ帰らせて頂くのですが、その日は私にも畠山にもわかる筈はありませんでした。しかし主は先生を通してお語り下さっていたのです。

外泊した一日、彼は私を呼んで申しました。「自分のいなくなった後のいろいろな事……宏と紀美ちゃんと三人で仲よく暮らして行け……」と。私は涙が出ました。終りが近いと思いました。

毎年盆と正月が来れば、私が神棚をまつらないと言ってさわいで、大変困らせておりました。さりとて自分で神棚を買う事は、神がお許しになりませんでした。それは後程のべさせて頂きます。仕方なく榎本先生、河本のおばあちゃんにお話しをしましたら、「まつってあげて、せわをして上げなさい」と教えて下さったのが今から一〇年前の事です。盆には御供物、灯明をあげて、「お父さんどうぞ、まつってあげましたよ」と言います。彼は年に二度、柏手を打って（本当の敬虔な神徒ではないが）拝みます。

七、神様のみわざに驚く

◆不思議な事が起りました。その神棚に異変が起りました。今年（平成五年）八月一三日の事です。「その神棚をかたづけてくれ」とみむきもしないのにびっくり致しました。ついに神様がお働き下さいました。感謝です。

八月九日、畠山は病室で申しました。「子供たちは何日に帰るのか？」、「一〇日に帰るようよ」、「一〇日にはみんなが集る」とへんな言い方でした。

孫や嫁も新しく加わって八月一四日、自動車の後部席に乗って山口県に海水浴に行きましたが、足に力がないものですからこけます。「これが人生最後の海だ」と自分も感じた様です。じっと沖の方をみていました。「主よ、畠山正三を早くお救い下さい。この人が御救いをうけますと、私はもう何もいりません……」。

八、兄弟のわかれ

◆八月二八日、近所にいる畠山の三歳上の兄さんが、肺癌で入院していた別の病院から外泊（帰宅）していました。「兄さんを見舞に行こう」と、髪はぬけてしまっていましたが、帽子をかぶり（案外おしゃれでしたから）、私はあとについて行きました。この時が兄弟の別れでした。兄は畠山正三の亡くなる一〇日前に此の世を去りました。二人共何も知らずに！

兄の見舞から帰り、昼食をとり、最後の一口の食物が食道に通ろうという時、急にのどに詰まってしまい、湯水も、つばも通らなくなってしまったのです。すぐ病院に帰り、エコーにかけました。癌が大きくなって食道がふさがったのです。「もう手の打ち様はありません。栄養剤で点滴を致します。出来るだけ長く命を保つ様に努力します。大事にしてあげて下さい」との医師の言葉……です。「主よ、もし御心ならば今年のクリスマスの御礼拝、新年聖会に何事もない様に……畠山の命を延ばして下さい」と祈りました。幸いにして癌の痛みは全くありません。咳と啖の激しい状態ですが、自分で啖を出せるので感謝です。

台風七号がやって来ました。私が家を見に一寸帰りました間に、伊規須先生が訪問下さいました。先生は主イエス様の御みたまに押し出され、畠山の救いの為においで下さったのです。

九、主にノックされる

◆「見よ、我戸の外に立ちて叩く。誰でもわたしの声を聞いて戸をあけるなら、わたしはその中に入って彼と食を共にし……」。主は先生のお口により、終りに近くなった畠山の心の扉をまた叩いて下さいました。此の時は先生のお話を聞く体

力はまだありましたが、あまり聞こうとせず、先生はお祈りをしてお帰りになられたとの事。嵐の中でしたが、幸いに息子が病院に行き合わせましたので、教会までお送りする事が出来ました……残念です。主は又畠山をお待ち下さいました。

一〇月に入り状態が悪化、熱も出てまいりました。医師が「肺に癌が入って来た様です」と言います。マルヤマワクチンも効力はありません。此の頃より、しきりに腕時計をやせた腕につけたがります。そして「時間がない、打合わせはすんだか？皆打合わせをしてくれ。働いて来い」と言い、私に「お前も行って働いて来てくれ」と申します。そして私には文句の言いたいほうだいに申します。夜になり消燈時間が来ると、そろそろ頭がおかしくなって、私もたまらなくなってまいりました。畠山は一番苦しい時だったのです。

一〇、遂に主を受け入れる

◆一〇月二〇日。「今晩あたりが山です。皆さんに知らせて下さい」と医師の言葉です。私は伊規須先生にすぐ電話をしてお出でを願いました。畠山は非常に状態が悪く、朦朧としておりましたが、先生のお顔を見るなり目を開けて、「ああ先生、あの嵐の日にお出で下さって……」と言います。先生は「畠山さん、主イエス様があなたの為に十字架におかかりになって死んで下さいました。主イエス様を信じましょうね」。畠山は「ハイ」とはっきり申しました。主を受け入れました。その時の彼の顔は柔和で笑みを浮かべ、私がかつて見た事もないやさしい顔でございました。先生は祈って下さいました。

一一、最後の願いをかなえられる

◆此所に、私と結婚致し四二年目に主の御救いを信じて救われました。感謝で一杯です。その夜、苦しい中に息子に申しました。（私は控え室で交替で寝ていました）。「宏よ、もう時期が来た。時間がない。自分の限度は自分がわかる。どうか家に連れて帰ってくれ、たのむ」。「お父さん、明日の朝、先生に言って連れて帰ってあげるよ」。「ありがとう」。彼は安心致しました。その夜も生命はあたえられました。

夜が明けて主治医に話すと、「とても無理です。途中で亡くなるかも知れません」、と言います。しかし私たちは、「たとえどうなっても病院の責任ではありません。本人の意志、願いを最後に叶えてあげたいのです」。ねばり強い交渉の結果、とうとう病院側で、民間医療移送車を用意してくれました。

朝の事ですから、市立病院は外来患者で一杯です。主治医や看護婦さんも付き添いに来られませんでしたが、嫁の紀美枝さんの同僚の方が、夜勤明け一睡もしていないのに二人で来てく

れて感謝でした。彼女らの勤めは養護老人ホームなので、本当に上手に病人を取り扱ってくれました。

途中、酸素吸入をしながら、「お父さん、此所は何町ですよ」と説明しながら、通いなれた曽根バイパスを通ったのですが、「そうか、そうか」と喜びに溢れていました。晴天でした。

家に着くと庭の見える部屋に休ませます。満足の顔です。伊規須先生にお出でを願っていましたので、「お父さん、伊規須先生ですよ」と言いますと、主を信じ受け入れてからの彼は、「先生、大変お世話になりました」と言いました。主イエス様と先生に最後の感謝をしたのだと思います。

一二、一切から解放された日々

◆一〇月二六日、先生がお帰りになり、一日中、酸素吸入をする。訪問医療の看護婦さんに来てもらって、点滴が続く。

二日目、午前一〇時頃、静かなので一寸襖を開ける。すやすやと眠り、咳一つ出ていない。うその様です。あまりのおだやかな表情に驚きます。看護婦さんが来ても、もうこのまま静かにする事にきめる。助命医療器具は一切不用。目を覚ましました。「お父さん、気分はどうありますか?」。子供達も皆いましたが、「ああ、すべてから解放された。皆で一緒に暮したかった……（晴天で明るい日ざしの庭の方にむいて）……美しい庭じゃなあ。自分の建てた家だ」と喜ぶ。

甥、姪、親族がみんな別れ?に来る。「みんな仲よくして行けな」。問屋さん、昔からの友達、本当につぎつぎとおいでるのですが、ニコニコと手をさしのべて握手。「畠山さん、早く元気になって、又旅行に行こうね」と清水さんと言う近所の古いお得意さん、笑顔で握手の上にウインクまでして応対です。主イエス様は、畠山正三に全き御救と平安をお与えになられた事を感じました。

あまりにおだやかで楽しく話すのに清水さんはびっくり、そして後に言われるのは、「畠山のお父さんが天国に行かないで誰が行くだろう」と……。それ程主は、畠山をお救い下さいました。彼は最後によき証しを残して行きました。

一三、天を指さしながら

◆話す事も、言う事も、皆言い、会う人にも会いました。「紙と書くものをくれ」と、子供用マジックトバンを持ち、自分の生れ育った韓国太田の絵を書き、「此所が山、これが川」と説明をしながら、何かわかりませんが記しました。丁度四国で同窓会がある頃でしたので、懐かしかったのでしょう。

二七日夕方七時頃です。親戚が皆引き上げて、私共親子五人と孫が二人だけです。次男の義信が千葉から着きまして大変喜

びます。半分体を起してもらった時、嫁が私に申しました。「お母さん、容体がおかしいですよ」と。

「上か下か?上か下か?上か下か?」と三度申します。そして指を上下に向けて、「上か下か?」、もう最後が来たようです。「上よ、お父さん上を向いてごらん。上、上」と、皆同じ事を声を大きくして言う。息づかいが荒くなり、顔色がおかしくなりました。彼は天に向かって指さします。様子がかわりました。指を胸元におろしました。「お父さん、主イエス様がお迎えにおいでになられます」。嫁の紀美枝さんが、「お父さん、大きな息を吸って……はい、又吐いて」、老人ホームのお年寄りの最後を看病しますのでよくわかります。上に上げた手を胸におろします。私は詩篇二三篇を口にしました。

「エホバはわが牧者なり、我乏しき事あらじ。エホバは我を緑の野にふさせ、憩いの汀にともない給ふ。たとへ我死の影の谷を歩むとも災を恐れじ。汝我と共にいませばなり」

大きな息をして静かに目をとじました。主のみもとに旅立って行きました。午後八時四〇分でした。

一四、神様が最善をなされた

◆一〇月二八日、榎本先生がわざわざお越し下さいました。「榎本先生、お祈り有り難うございました。とうとう神様はお救い下さいました。四二年です。先生と彼はお約束して、教会で結婚式を授けて頂きましてから……」。

榎本先生のお祈り。「畠山さんをみもとに召してお救い下さいまして感謝致します。『彼死ぬれども信仰によりて今なお語れり』。残された家族が益々神様におしたがいする様に……」。そして私に「本当によかったですね」と言って下さいました。

色々な中を通り、すぐ先生に御相談をしては祈って頂きました畠山です。そして先生は私に、「英子さん、あなたが一番駄目です」、先生の痛いお言葉に私は頭を叩かれて目が覚めました。先生は私の日曜学校の時から只今六八歳になるまで全部神様によって、神と共におられてお見通しです。先生のおっしゃる通り、私は臆病者で、常に畠山の顔色ばかり見て、遠慮ばかりしています。畠山に信仰の武具をとって立ち向って行く勇気がない。大きな声をたてられると引込んでしまいました。お酒が好きで荒れた時がありましたが、その当時はすぐ榎本先生にお電話をしました。先生は、「英子さん、神様は畠山さんより弱いお方ですか?畠山さんより強い方である事がわからないのですか?信仰を強くもち祈りなさい」と言われました。

私がもっと祈り深く信仰をもって立ち向かったら、もっともっと主は早く畠山を御救にあずからせて下さった事でしょう。自分は半分は商売に、半分は信仰にと曖昧で、自分の信仰のなさ

を棚にあげていました。先生はじっと見られていたのです。

一五、務めいそしめとあかし

◆伊規須先生の司式のもとに、葬儀・通夜すべてをなさって下さいました。通夜には、八幡からも戸畑からも、土地のわからぬ所にわざわざお出で下さって感謝です。先生は「畠山さん、讃美歌は何番にしますか?」と言われました。畠山は教会に行きませんので、愛歌と言えばありませんが、彼は小さい時によく日曜学校に行っていましたので、クリスマスの歌「きよし此の夜」の讃美歌は歌う事が出来ました。

（この町内にクリスチャンが二人いられます）。後はまだ神道や仏教の方ばかりで、キリスト教の葬儀を知りません。ですから畠山が最後に、「働きなさい」と申しましたので、「つとめいそしめ花の上の」（三六八番）は如何でしょう。この讃美歌でしたらだれでも意味がわかりやすく、うたいやすいと思います、とお答えしました。先生はプログラムを二五〇枚用意して下さり、大へん、夜からお多忙がつづきました。

一六、始めてのキリスト教葬儀

◆ここ田原は、私が結婚して来ました時は、田んぼと畑の中に百軒の家しかありませんでしたが、只今六百軒になっています。とにかく田原区で初めてのキリスト教葬儀を、神様は私共畠山家に授けられました。皆すべての人が、ただただびっくりするばかり、神様は本当に畠山正三を大きな恵みにあずからせて下さいました。後で親戚の人たちが私に話してくれました町の人々の話題。

一、本当におごそかで清楚な祭壇です。はじめてみました

二、讃美歌がわかりやすく、又どの讃美歌もいいですね

三、私達も死んだらキリスト教のお葬式をしようかしら

と話し合っていた人が何人もいたそうです。

お説教もよく分かりました、よいお話でした、と皆いわれました。真の神様のお話など、此の地の人は聞いた事がないのです。葬儀社による解説者の運営をマイクと音楽と共に進行致すのですが、オルガンの響きも厳かだったと話し合われていたらしいのです。

一七、子よ心安かれ

◆神は畠山正三のみ救いによって、此の田原町区に大きなみわざをなさいました。

一夜明けて外に早く出ました。今日は御聖日です。天を仰いでみると雲の晴れ間より、「あんたも一生懸命に馳せ場を走って、イエス様によって、此所へ来させて頂きなさい」、と笑顔

で語りかけてくれる様です。神様、ほんとに私は罪深い者で、主人にも全くよくしてあげませんでした。永い年月の間、これといってよい事はしてあげていません。おゆるし下さい。礼拝がすみ、お祈りの時、伊規須先生に祈って頂きました。「子よ、心安かれ。汝の罪ゆるされたり」と聖言を頂きました。

一八、イエス様にお報いするため

◆後日、榎本先生、百合子先生をお訪ねしました。「先生、わざわざお出で頂き有り難うございました。畠山は天国で感謝をしておりますでしょう。私はもういつ死んでもいいと思います」と言いますと、榎本先生は、「英子さん、あなたはまだ天国には行けません」。また此の度も榎本先生に頭をたたかれた様でした。眠気からハッとさめた様です。「あなたはまだ天国には行けませんよ」。

「先生、それはどう言う事でございますか?」。「英子さん、イエス様は畠山さんと言う御主人からあなたを解放されたのです。これからは一人でも二人でも主イエス様のみもとに救われる方を導かねばなりません。そして解放して下さったイエス様にお報いして使命を果たさなければ、まだまだ天国には行かれません」。「わかりました。今後御旨に適った日々を送ります」。

榎本先生は私の日曜学校の時から六九歳の只今まで、よく私の性格をご存知です。一番私をよく知っていて下さいます。

一九、墓も準備されていた

◆先に申しましたお墓の事です。「神棚がいる」、「墓がいる」と言って、荒れ狂ったと言っていい程の時がありました。村の親戚や人々の入れ知恵もあり、私に率先して造らせたかったのですが、同調しませんでした。毎日戦いでした。でも神は私をまもられました。

その墓地は私の家の近くですが、造成して分譲致した所です。他の家は一〇年前にたてられましたが、地盤がゆるんで斜めになったり、まがったりしています。この固まった地盤に、神は畠山のお骨を、「聖言を入れたキリスト教のお墓」に入れて下さいます。あの時建てていましたら、神道で建てていましたでしょうに、感謝です。

それに、下の公園へ降りる入り口で、町の人々が集まる所で、必ずみあげて通る所を、主イエス様は私に（くじ引き）によって当てさせて下さっていたのです。「すべての事、神より出で、神によって成り、神に帰するのである、アーメン」

二〇、小さな善行を顧みられた

◆また、主は一つでもよい事があれば報いて下さったのだと

思います。畠山は中国より（両親は韓国より）引き揚げて来たのですが、今から四四、五年前に、此の田原村に住みました。彼は子供たちを集めてクリスマス祝会を催したのだそうです。自分が小学生の頃、日曜学校に行っていたのです。自分の給料でプレゼントを用意、松か杉の木を山より切り出して、バケツに土を入れ、本家の姉さんとクリスマスツリーを造ったそうです。村の子供たちは初めてのクリスマス、今その当時の姪や子供たちが五〇歳を過ぎていますが、とにかくこの村でキリストの御降誕を聞き、讃美歌「清し此の夜」を歌ったのも初めてです。

主はこの畠山に、初めてキリスト教、主の御名による葬儀を、ご褒美に与えられたのではないでしょうか！せっかく主の御降誕の事まで子供たちに話したのですが、信じなくて残念でした。主は取るに足りない此の畠山家に、「主がどんなに大きな事をして下さったか、どんなに憐れんで下さったかを思い出しなさい」とお声をかけられました。そして私には最後まで忘れる事の出来ない御言葉を賜わりました。「恐れおののいて己が救いの達成の為に努力しなさい」。この聖言を深く心にとめて、残る生涯を送ります。榎本先生、伊規須先生、泰子先生、八幡、戸畑教会の皆様、ありがとうございました。

二一、雨の葬儀も神様の憐み

◆葬儀の朝は、風の少しある雨の日、祈って雨のやむのを願っておりましたが、一向に止みません。テントを張ったり、隣組の方もよくして下さったのですが雨。先生にも祈って頂きましたが……。河本米子奥様に電話しました時、お祈りをお願いしました。奥様が言われるには、「英子さん、雨が降ってもよろしいではありませんか、イエス様にお任せしなさいよ」。

参列者の身内の人々曰く、「一〇月の終りは刈入れ時で、晴れたら稲を片付けなければいけないが、雨が降ってよかった。初めてキリスト教のお葬式にださせて頂いて……」

年を取って来ると信仰まで弱っていました。河本米子奥様の主に信頼してお任せしていられる信仰に、私は脱帽!!

以　上

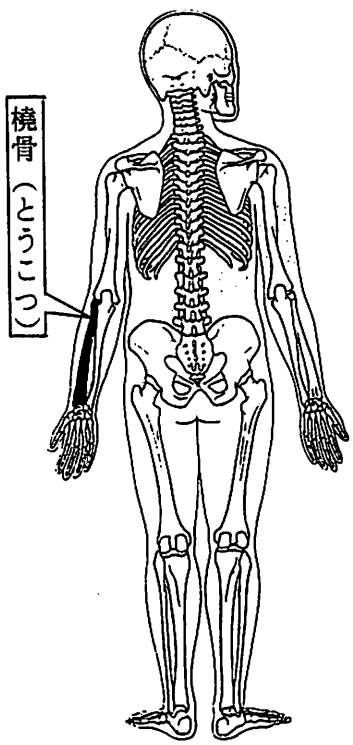
橈骨神経麻痺

「わたしの恵みはあなたに対して十分である。
わたしの力は弱いところに完全にあらわれる」
（Ⅱコリント一二・九）

伊規須　太郎

◆一九九三年一一月三日（祭日）は、各所で様々な行事が行われている中で、私たち地域会議（明るい沢見をつくる会）の「すこやか青少年部会員」（私が部会長です）の有志は来たるべき行事に備えて、子供たちのために出し物の工作をしていました。ふだんは文具店主であったり、自転車店主であったりする人たちが、ボランティア活動をしている訳です。このたびの工作は、六メートルもある大きな物なので、教会の車庫を使いました。

◆私はふだんから、いろいろな工作をしますので、コマゴマした道具もあり、仕事は大いにはかどって夕方までに予定の工作を終りました。こういうチームでこんな仕事をしたのは初めてでしたから、仕事上でも人間関係でも学ぶ所が多く、楽しい半日でした。仕事は特に力を使う程でもなく、機械類にも慣れているので、私は何の気疲れもありませんでした。



◆翌朝はいつものように早天祈祷会を終り、朝食後、次の日曜日のために週報の準備をしました。お昼前だったと思います。机に座ったまま何分間かウトウトしたようです。気が付くと左手がしびれていました。よくあることですから、それほど気にもとめず、さすったりたたいたりしましたがなかなか元に戻りません。こうして私の「橈骨神経麻痺」は始まりました。しかしそれは、あとから分かったことです。

◆その日は、翌週の定例部会（私の主宰する「すこやか青少年部会」）の案内をする日でした。案内状もすでに出来上がっていましたから、片手で自転車を運転して、地域の部会員宅を回りました。回りながら左手を動かしてみると、肘はどちら向きにも動き、力も入りますが、左手首が全く持ち上げられません。手首どころか指一本も起こす事が出来ません。重りをつけ

たら一グラムも上がるまいと思われました。

◆案内状の配布から帰り、左手で、ためしに重ねた紙をはぐろうとしましたが、紙一枚ぶん指を持ち上げる事が出来ません。また、ポケットに手を入れて、ハンカチを掴もうとしますが、手首が垂れたままですから、ハンカチを押し込むばかりで、どうしても取り出す事が出来ません。顔を洗おうとしても左手が開きませんから、極端に言えば棒の先で顔をこするようなものです。私は右ききですが、左手で食器を持つ事が出来ません。無理に手を開いて持たせるとしっかりにぎったままになります。一番困ったのはワイシャツのボタン掛けです。少し小さくて丸っこいかわいいボタンは殊に難物でした。「ああ、このボタンを設計した人は、こういう障害者のことを考えなかったな」とすぐ分かりました。その他にも生活上いろいろ不具合が出てきました。

◆いろいろためしていると、実際は左手を動かしていない（動かない）のに、どんどん左手が重くなってきて、ついには耐えられないほどだるく苦しくなり、左手を抱えてしゃがみこんでしまいます。それは、動かない手を動かそうとして、筋肉が緊張し続けているためでした。

◆翌日も翌々日も変らず、しびれは続いていました。左手先の皮膚感覚も相当鈍くなっているように思われました。明らかに異常でした。しかし、私の心はずっと平静でした。お祈りしていると、「私のからだは神様が一番よく知っておられる。使命のある限り支えて下さるから大丈夫。これを通して何か教えて下さるに違いない」と確信が出来ましたから、普通どおりの生活を続け、定期集会も平常通り守っていました。

◆あの日、一緒に仕事をした部会員には黙っておこうと思っていました。（地域会議）役員の残り任期はあと四－五ヶ月ですから、若干の不自由があっても、終りまでやり遂げようと思っていました。万一、何かの行事で支障が出るようであれば、その時は「副部会長の代行規定」によってF氏にお願いしようと考えていました。

◆しかし、全く突然「代ってほしい」と言うのもどうかと思い、F氏だけにコッソリ打ち明けたところ、大変心配して、「是非検査を受けて治療をして下さい。病院に行かれる時はお伴させて下さい」と言います。しかし私は気が進みませんでした。なぜなら、今回のことはすべて神様の手のうちにあると思っていたからです。しかしF氏が重ねて、「是非」と言うので、私は彼を納得させようと決心しました。そこでU姉に最初からの経過をお話しして、ご主人のお知恵を拝借し、結局、八幡病院の整形外科に行くことにしました。

◆日曜日がすんで、一一月八日（月曜）の朝、市立八幡病院

に行きました。久しく病院に行きませんので、病院設備の充実ぶりに驚きながら、整形外科の窓口をおとずれました。

待つ間、院内を歩き回って、病院のシステムを見学しました。個々の機械設備などのほか各科診察室の配置や仕事の流れなどに注意しました。私の書斎は超高密度ですから、物の整理について参考になる点はないかと、部屋の中をそれとなく覗いて回りました。

◆当日（月曜日）整形外科に受診したあと、火曜日に同病院の内科で数項目の検査をしました。さらに水曜日午後、内科医師による筋電図検査をしました。筋肉（の束）ごとにその両端に電圧を掛けて、筋肉の収縮状況を調べるものです。数日後、それらはすべて異常のない事が分かりました。

◆一一月一五日、再び整形外科に行くと、「結局、原因は分かりませんが、一過性のものではないかと思います。神経の反応は左右の腕で差異がないので、左手の神経が切れている事はありません。自然に治ると思いますが、治ったときに筋肉が萎縮していては困るので、つとめて手を動かしていて下さい。薬としては、筋肉の栄養剤をあげましょう」と言うことでした。

◆約一ヶ月後の一二月初旬、手首が少しづつ上向きに動くようになりました。力はあまり入りませんが、麻痺のはじめ、手首を起こす力が一グラムもなかったのに比べれば、数一〇グラムはあろうと思われました。

◆そのころ、また部会員が集まって工作をしましたが、事情を知らない人にも、異常を気付かれないですみました。九三年末から九四年一月にかけて、地域会議の大きな行事が三つ続きましたが、左手をかばいながらそれらを乗り切りました。そうしているうちに、次第に力が入れられるようになり、皮膚感覚も戻りましたが、なお内部（特に左親指の付け根付近）でときどき何かがコキンと小さい音をたてるような感じがします。このあたりが問題の部分であることがはっきりして来ました。

◆その間に学んだこと ――――

一、障害を持つ人に対する思いやりが出来ました。障害を持ちながら、何ごともないように振る舞う事がどれほど大変か、よく分かりました。

二、筋肉のデリケートな仕組みとその働きに改めて驚きました。動くほうの手で、ためしに指をほんの少し動かしてみると、遠く離れた場所の筋肉まで微妙に動きます。健康な時はその事に気付きませんでした。筋肉の働きは体の営みのごく一部ですから、「人体は小宇宙」と言うのは真理だと思います。

三、体の不自由に対して、色々工夫をするようになりました。歯を磨くのも、顔を洗うのも、ポケットからハンカチを取り出すのも、みな生まれて始めての経験になりました。あれこれ工

夫するうちに、「人間の体はこんな事も出来るのか」と、新しい発見をして嬉しくなりました。

四、新聞を見てもテレビを見ても、「障害」と言う字が非常な親しみをもって私の側にあることを感じました。「人が障害を持つ事はむしろ幸福ではないか」と思い、ついには、「障害が無いことは不幸ではないだろうか」と思うようになりました。

◆一〇日ばかりすると、ある程度の慣れが出来ました。すると、いくら思い出そうとしても、最初の感覚がもう分かりません。何事もその時を大切にしなければならないと思います。そこでこの証しをすぐ書かなければと思いながら、相当時間がたってしまいました。

◆異常の起った頃、九四年新年聖会の準備は最終段階に入っていました。一―二ヶ月前からいろいろな手法で準備を始め、標語案もいくつか上がっていました。しかしここに来て、「障害」というテーマが急浮上して来ました。

新年聖会のあとも、そのテーマで次々に教えられています。何かの準備のためかも知れませんが、すべては神様の手のうちにあることで、うかがい知ることはできません。

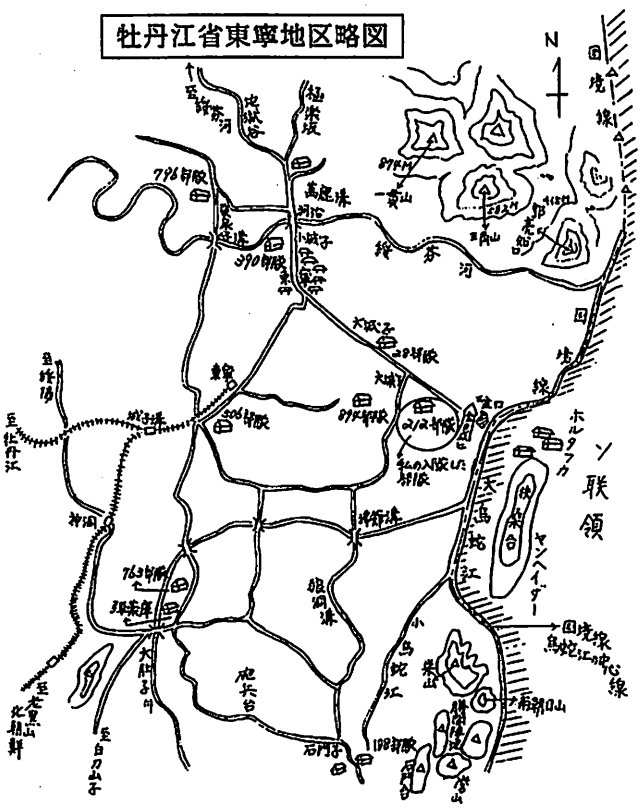
◆私はこのたびの体験を通して多くの事を学びました。神様は実に素晴らしい事をなさいます。主はほむべきかな！

（一九九四年二月七日記）

我が思い出（三）

鈴木一幹

満州関東軍での思い出を語る前に、当時私の所属した部隊と現地の気候風土等について予めご紹介することにしたい。



一、第一二師団について

当時福岡県久留米市に本拠を置く第一二師団が、東満州国境の牡丹江地区に派遣されたのは昭和一一年（一九三六年）と聞いている。それ以来終戦まぎわまで、主としてこの東満辺境地区の治安維持と、ソ満国境の警備に当って来た。

この地に送り込まれる兵隊は、主として福岡、佐賀、長崎の三県出身の現役兵であった。

我々が入隊した頃の一二師団の駐屯地は、牡丹江省東寧県で（略図参照）城子溝に師団司令部があり、同じく城子溝に歩兵第四八連隊、通称満州第三〇六部隊（久留米）、大城子に歩兵第二四連隊、通称満州第八九四部隊（福岡市）と野砲兵第二四連隊、通称満州第二一二部隊（久留米）、石門子に歩兵第四六連隊、通称満州第一〇八部隊（大村）、大肚子川に輜重兵第一八連隊、通称満州第七九六部隊（久留米）が配置されていた。その他大肚子川に騎兵第一二連隊、大城子付近に工兵第一八連隊があった。

この第一二師団への指揮命令は、牡丹江にあった第三軍司令部が行っていた。当時の第三軍司令官は陸軍中将川辺正三閣下で、第一二師団長は陸軍中将笠原幸雄閣下（後の関東軍総参謀長）であったと記憶している。

我が第一二師団の駐屯した東寧地区は綏芬河の支流、大烏蛇江を境としてソ連の陣地に対峙しており、このソ連陣地のある正面の台地を我々は日本名で扶桑台と呼んでいた。またその北側にはソ連の国境の町ポルタフカの白壁の家を遠望することができた。

何れ日ソ開戦の暁には、この敵陣地を一気に撃破し、ウラジオストックの後方を遮断し、沿海州を制することが作戦のねらいのようであった。

我が砲兵隊の毎日の演習で、砲撃の方向指示を受けた目標は、北方では険しい山容を見せる郭亮船口（四一五米の山）、南方は石門子、東方では永久陣地（勝鬨陣地）のある南朝日山・栄山等があった。

この間に展開した岳陵地帯の曠野の窪地に師団所属の前記各部隊が分散配置されていた。

我々が演習で曠野を馳け、間道を行軍し、また馬の運動で隊外に出て通過した地名に狼洞溝、佛爺溝、城子溝、大城子溝、萬麓溝等「溝」という字のついた地名が多いのは、こう言った地形から名付けられたものと思われる。

東寧の町は、兵隊目当ての飲食店や慰安所のほか、バラック建の映画館等があったが、国境の町らしく何の潤いもない殺風景な町でした。しかし休日ともなると他に行く処のない兵隊達は酒や女を求めて街に溢れていた。

因みに、前述の勝鬨陣地は昭和二〇年八月ソ連軍が怒涛のように満州領内に進攻を開始した後も、地下陣地に立てこもり一歩も引かず、八月二八日、関東軍の特使の命によって降伏するまで徹底的な抗戦を続け、ソ連軍を悩ませたとのことであった。この陣地を死守した部隊は歩兵第七八三大隊の将兵約一〇〇〇名であったとのことである。

二、満州の気候と初年兵

初年兵の苦労は兵種（歩兵とか砲兵・工兵等の別）により差はあるが、特に幹部候補生有資格者に対しては、「関東軍の軍人精神をたたき込んでやる」との美名のもとに、古年兵のひがみ（来年の今頃、将校になれば、捧げ銃しなければならぬので、今の内に殴っておけ等）からくる陰湿な私的制裁はひどかった。

初年兵は同班内の古年次兵の洗濯や靴みがきのほか、身の回りの世話、馬の世話までやらなければならず、野砲隊や輜重隊では初年兵は馬からも苛められて辛い日々が続いたものだった。

寒風吹き荒さぶ国境の冬は一〇月を過ぎると毎日温度が下り、一一月頃からは零下となり、一二月から翌年三月頃までは酷寒となり、零下四〇度位まで下る。毎朝営庭のポールに三角の赤旗が何枚上っているか、一枚が零下一〇度で、三枚上っていれば、零下三〇度ということだった。これを見て、服装を整えていた。（例えば今朝は零下一〇度であるから防寒帽の垂を下におろしてかぶる等。）

高原だから空気までが凍って固体化するような感覚である。積雪は深くて二〇糎位までで、風で飛ばされ、降った雪もすぐに凍り付いていた。室内ではペーチカのお陰で二〇度以上の暖かさで、部屋の内と外との温度差は実に六〇度近くあり、外から急に部屋に入ると一瞬息が止まる感じで、しばらくは眼鏡が拭いても拭いても曇ってよく見えず、ウロウロしていると動作が遅いといって、ビンタのたねになった。風呂からの帰り道、外に出てタオルを一振りしただけでピーンとなり、放尿すれば、そとの方から見ている間に凍ってゆき、大便の時はよく下を見てからしゃがまないと、尖ったもので刺されるという程、寒気は厳しいものでした。

東満の春は非常に遅く、五月頃やっと雪が解け初める。

ほとんど未舗装の道路は、いたるところ、どろどろのぬかるみとなり歩行は大変であった。六月になると曠野は一度に花園と化し、芍薬、百合、あやめ、菖蒲、鈴蘭、迎春花などが咲き乱れる。それは延々と野の果までも埋めつくし、一望千里の花のカーペットである。

さて以上で概略のご紹介を終り、いよいよ私の初年兵生活にもどることにしたい。

三、赤飯に尾頭つき

衛門を通った初年兵四百人は、連隊本部前の営庭に各班毎に整列し、輸送指揮官村上大尉殿による人員点呼の後、各中隊に分散引率された。

引率の山崎曹長殿より、「当中隊は満州二一二部隊所属の第四中隊である。中隊長は前田克衛中尉殿で、只今は冬季演習に出ておられる。ほとんどの兵も留守であるが明日午後には帰隊の予定である。当中隊の内務班は一班から四班まで四つある。今から各班の引率者が来ているので、名前を呼ばれたら呼んだ引率者の方に集るように」と説明の後、それぞれ班毎に分けられた。中隊の初年兵は約五〇人で、第四班は一二名でした。私の第四班は第四中隊の建物の一番奥の部屋で、その先は洗面所と厠（カワヤ＝便所）になっていました。

戦友の川上二等兵も同じ班でお互にほっとしました。

ガランとした班室には、留守をあずかる中村源治兵長殿と上等兵の幹部候補生殿二人のみで我々一二名を迎えてくれ、部屋中央の長机（食卓）には既に夕食が用意してありました。

口髭を生やし、見るからに荒武者の風貌をした中村兵長殿は、「やあ、貴様等ご苦労であった。皆の来るのを首を長うして待っちょった。今日は歓迎のため特に夕飯は赤飯と鯛の尾頭付、鯛の味噌汁等お祝いのご馳走である。今から食べながら、おれの話を聞いてくれ。」

一同腹ペコになっていたので、一斉に食事を始めた。実にうまい。やっと人間らしくなった感じだが、久留米を出てから四日間、ゆっくり食事もできず、また風呂にも入っていないので、体が汗臭く、あちこちが痒い。

しかし今夜の食事は、たしかに内地ではなかなか食べられないと思った。鯛等はどうして調達したのだろうか、この満州の奥地によくぞ運搬できたものだと、不思議に思うばかりでした。

中村兵長殿の話しによると、明日午後から中隊長殿や、第四班々長殿よりそれぞれ歓迎の挨拶があるとのこと。それから現役で入隊して以来五年になり、この間一度も内地には帰ったことがないこと。昨年は同年兵の大部分が満期となり除隊となり内地に帰ったが、自分と第一班の成瀬兵長と第三班の花田上等兵の三人だけが残された。もうすぐに来年になるが、そうすると六年兵になる。おれは五年間、日本人の女を見たことがない等とぼやいていた。

食事後食器の後片付をして後、寝台の割当が行われた。

廊下から一番目は野中二等兵、前原出身でお寺の長男、二番目は緒方君で建築会社で「トビ職」をしていたよし、三番目が戦友の川上君で長崎市出身、長崎高商を卒業後、三菱造船所経

理課にいたとのこと、四番目が私で、五番目は八木君で香椎出身で船員をしていたとのこと、六番目は山崎君、田川出身で小学校の教員だったとのことでした。他の六人は食卓を狭んで向い側の寝台になっていました。

毛布、敷布、枕等の支給を受け、寝台の上に整理し、寝台の奥の整理戸棚に持参した雑のうから所持品を出して移し入れました。その中には軍人勅諭、戦陣訓等のほかに讃美歌と聖書も納め蓋をし、やっとほっとしました。その夜は特に一〇時の消灯時まで、古兵殿三人を交え初年兵一二名楽しく話しに花が咲きました。特に中村兵長殿が「貴様達は今夜からは南京子さんや白井イカ子ちゃんがかわいがってくれるので、覚悟しておけ」と言われ、初年兵一同何のことだかわからず顔を見あわせた。

四、馬糞街道

朝六時の起床ラッパ（起きろよ起きろよ皆起きろ、起きないと古兵さんにしかられる）で飛び起き点呼の後、真暗の中全員駆足で、中隊から約五百米離れた第四中隊の馬舎に引率された。そこで馬舎週番上等兵殿から初めて馬の取り扱い方を習った。習ったと言っても馬舎の馬房に繋がれている馬を一頭づつ引出して、水飲場に連れて行き、丁度ソーメン流しのように設けられた木製の水槽に馬の口を引張って行き、馬が飲み始めると馬の喉に手を当て飲み込む回数を数え、飲み止んだら、もとの馬房に引入れる。その際馬舎の入口に居る週番上等兵殿に「久緑（馬の名前）四六回であります。」と飲んだ回数を報告すると、週番上等兵殿は「久緑四六回、よし。」と答え、ノートに記していました。これは、二〇回以下の馬には馬糧は与えないことになっており、馬の病気の詮痛（糞づまり）防止のためだとのことでした。ほとんどの初年兵が馬を扱うのは初めてで、恐さもあったが、軍馬は調教してあるためか、比較的おとなしく柔順でした。

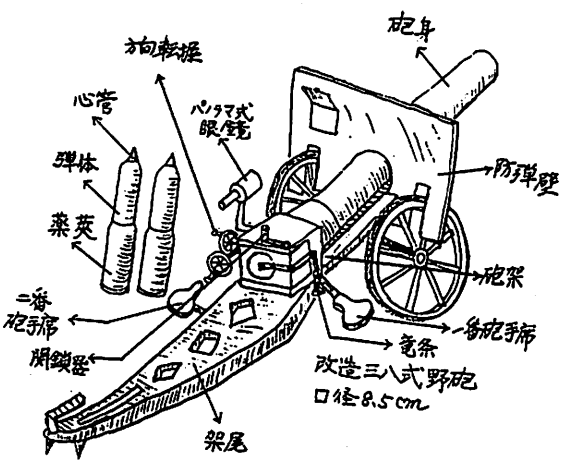
次の作業は馬舎の外に山積された馬糞の入ったカマス（重量約六〇キロ）を、一人一俵づつ担いで、馬舎から約三百米の裏門を通り、更に約百米先の大鳥蛇江の川土手まで運び捨てる作業でした。門を出ての百米は川土手に登る坂道でした。馬舎当番一等兵殿が二人掛りで馬糞カマスを持ち上げ、「誰からでもよいから肩を持って来い」とどなり、初年兵は我れ先に腰をかがめて肩を出した。カマスの数が約三〇俵位あるので、遅れた者は三回運ばされることになるからだ。

朝飯前の作業であるので走り出しても力が入らず、ふらふらしながら衛門にたどり着き、衛兵に「第四中隊第四班鈴木二等兵馬糞を捨てに来ました。」と大声で叫ぶと、「よし通れ」で、やっと門外に出ると、今度は何なりの坂道で、皆ヨチヨチ歩き

で、どうにか土手の頂上に到着すると、土手上は六米の道路があり、この道路を横断した先が川に向って斜面になり、あたり一面馬糞の海でした。カマスから馬糞を捨てて、休む暇なく、次を運ぶため急いで帰らなければならず、一同小走りで馬舎を目差した。二回目を終えて到着すると、馬舎当番一等兵殿が「お前達二人が一番遅かったので、残った二俵はお前達が持って行け。」と、私と私の後になっていた戦友の川上君に命じました。二人共他の者より体力もなく、入隊前には米俵一つも担いだことがない私共は、再びふらふらしながら裏門に近づいた頃、後に付いて来ていた川上君が「あっ、しまった」と大声を上げ、肩からカマスを落しているではないか。「鈴木君どうしようか」と今にも泣き出しそうな声で私の方を見ていた。六〇キロのカマスを一人で持ち上げ担ぐことは到底無理なことだ。私も止っているので、肩はしびれ今にも落しそうになった。私はとっさに、「川上君、半分捨てて軽くしたら上るだろう。」と言った。川上君は半分以上カマスから馬糞を道路上に出し、やっと肩に乗せ歩き出した。捨て終えて馬舎にもどったら、他の初年兵は竹箒で馬舎周りを掃いていた。我々二人が帰ったのを見た週番上等兵は、「初年兵集れ、横一列に並べ。今の馬糞捨て作業中、誰か道路に馬糞を捨てた者が居る。後片付は当番兵にさせるが、今後絶対にこぼすな。誰がこぼしたかは詮索しないが、第四班初年兵全員の連帯責任である。今から皆に関東軍の軍人精神をたたき込むためにカッパをくれてやる。眼鏡をはずせ、歯を喰いしばって足を開け。」と言って、一番右端にいた川上君から順に入隊初のカッパ（鉄拳）を受けた。この時初めて馬糞のいやな臭いが、頬から鼻に伝わった。初年兵の中には鼻血を出す者、唇から血が出ている者もいた。

一人の失策が皆に迷惑を掛けるなあと思い、また私のアドバイスも責任だなと思い胸が痛んだが、しかしあの時は、それ以外によりよい方法は見当らなかったと思った。

内務班に帰って川上君が初年兵皆に、「今日は自分の失策で皆に迷惑を掛けてすまなかった、許してくれ。」と詫び、皆も「仕方がないよ、我々でもあることだからな、心配するなよ。」と彼をなぐさめた。この馬糞捨て作業は、これから毎朝初年兵の日課になっているとのことで、



余程の体力がないと到底ついて行けないなと思った。

午後、冬期演習から帰隊した兵隊で、班内は一度に活気付いた。当四班の人員は、一二名の初年兵を含め約五〇人になった。

中隊長の前田中尉殿より初年兵全員に対して歓迎の挨拶があり、中隊付の教官大神少尉殿、同じく石井見習士官殿の紹介があり、班に分れた後、第四班の班長佐藤伍長殿より歓迎の挨拶と班内の中村兵長殿を初め右兵殿の紹介があった。

午後三時頃、第四中隊の初年兵一同は、大神少尉殿の引率で初めて第四中隊の砲廠、弾薬庫を見学し、営外に出て、ソ連との国境線やソ連側の陣地を見分することになりました。

砲廠の建物は白煉瓦造りで、出入口の扉のみが木製で施錠がしてありました。建物前に整列すると、砲廠衛兵が駆け足で大神少尉殿の前に駆け寄り、捧げ銃をし「砲廠衛兵勤務中異状ありません」と報告すると、大神少尉殿は「ご苦労、今から初年兵に砲を見せるから扉を明けよ。」と命じました。

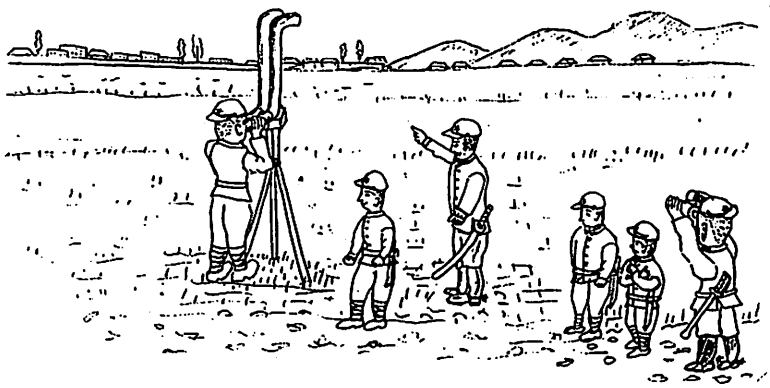
砲廠内に入り一同は初めて見る大砲の数々に緊張し、目を輝かせ、説明に聞き入りました。砲はその口径と砲身の長さで種類が分かれ、我が野砲隊の砲は口径一〇糎以下とのことで、一〇糎以上の砲は野戦重砲兵隊に属するとのこと。

当連隊の砲には一〇糎榴弾砲、八・五糎の改造三八式野砲および山砲の三種類で、当中隊は改造三八式野砲でした。

次に弾薬倉を見学し、弾体、薬莢、信管等の説明を受けた。更に一同は裏門から外に出て、馬糞捨場前の道路を北進すること約一キロ米で停止、ここで大神少尉殿より次のとおりソ連国境線と周辺の状況の説明があった。「前の川は大烏蛇江という川で綏芬河の支流で、川幅は約六百米、水が流れている部分は約四百米である。川の中央が国境線になっている。

川向うの小高い山は扶桑台と呼んでいる、この山の北側隣にソ連軍の陣地があり、ソ連の戦車隊が駐屯している。

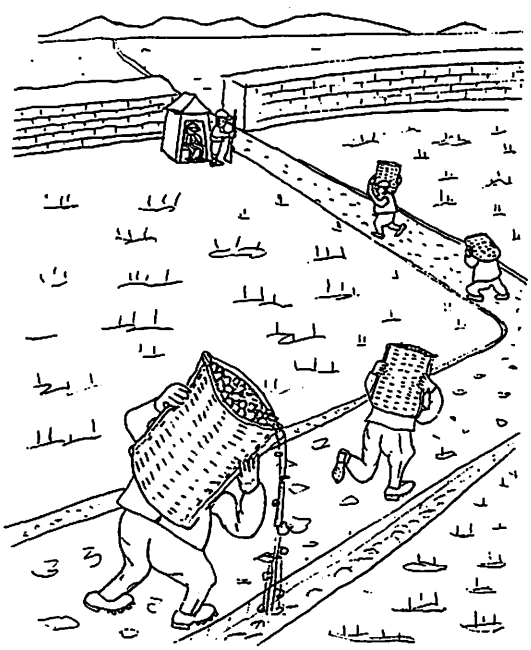
この川は一一月頃から来年三月頃まで凍結するので、川は歩いても渡れることになる。万一日ソ戦になれば、あの戦車隊と戦うことになる。観測用の大型双眼鏡（ほうたい鏡）を用意したので、一人づつ覗き、ソ連の陣地と戦車をよく見てお



くように。」と言われた。肉眼では見えなかったが、眼鏡を覗くと赤煉瓦塀越しに大型戦車が並んでいるのが手に取るように良く見え、近くに歩哨と思われるソ連兵数人の動くのが目に焼き着いた。緊張の一瞬でした。

帰隊し中隊前で解散し、それぞれの内務班にもどった。班内の右兵達は演習の疲れか、夕食が終り点呼後は早々と就寝してしまった。我々初年兵の寝台の上の段（二階）には、中村兵長殿や上等兵殿六人の寝台があった。私は九時の消灯ラッパ（新兵さんは、かわいやなー、また寝て泣くのかよー）が鳴って就寝したが、今朝の馬糞運びが思い出され、明朝からどうしたものかと不安になり、苦しいときの神だのみの言葉のとおり、入隊以来祈ったことがなかったお祈りをしました。

「天の父よ、どうか私に力を与えて下さい。私を守り、私に勇気をお与え下さい。また戦友が共にあなたに守られ、無事に任務を果すことができますように……」。毛布をかぶって、ここまで祈ったとき、私の真上に寝ていた陣内上等兵殿が階段を下りて来て、「おい、何をぶつぶつ言っとる。お前等二人、起きておれに付いて来い」とうながされ、私と川上二等兵とが後に従いました。行先は厠で、並んで立小便をしながら私達に話してくれました。「お前等今朝馬糞かつぎやらされ、誰かカマスを落して全員カッパやられたろう。あの馬舎週番上等兵は

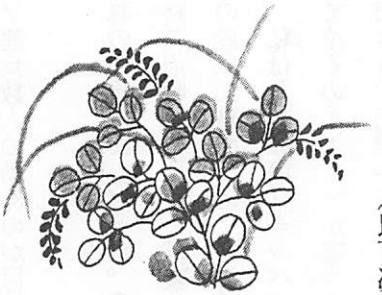


な、武田と言うおれと同年兵で、いいやつだ。演習から帰り、馬を馬舎に入れに言った時、武田上等兵からお前等のことは聞いていた。おれも三年前に入隊して馬糞捨てやらされ、落してひどい目にあった。その時おれも古兵殿に教えてもらった。従って困っているお前達に申し送る。お前達はやはりおれと同じで要領が悪い、あの道は我々の間では馬糞街道と言うてな、各中隊の馬舎から出る馬糞は、みなあの道を通って捨てられるのや。六〇キロもあるカマスを一回運ぶのに四百米、往復で八百米、二回行けば千六百米になる。お前等のモヤシみたいな体では到底無理だ。体が先に参ってしまう。『一つ、軍人は要領を本分

とすべし』じゃ。そこで明日からは馬糞をかついだら、カマスの口は開いているから歩きながら少量ずつこぼして歩くことだ。半分位撤けば大部軽くなるだろう。道路の両端は素堀の溝になっているので、これにこぼせ。馬舎からは週番上等兵がお前達の運ぶのを見ているが、道路の右側に寄って歩き、右側の溝に少しずつこぼして行けば、見ている方からは死角になって見えぬので、その方法でやってみよ、よいな。」と教えてくれた。

翌朝、馬舎で早速馬糞捨作業が始まり、二人は昨夜陣内上等兵殿から教えてもらった方法を実行し、軽くして運んだ結果、昨日はビリになった二人が、なんと三番、四番で到着し、二回の運搬で終り、これなら馬糞街道の運搬も何とか続けられると思った。

（以下次号）



新緑の旅

福岡大濠公園教会婦人会

御名と御血を崇めて感謝申し上げます。

四月末から五月始めの連休明け、人出の波も引いた一二、一三日、佐賀路を訪ねる小さい旅を致しました。

ぐずついた天候も当日は好天に向かう予報に安堵し、更に祝福されるように祈りつつ床に入りました。当教会の婦人会は恒例の小さな旅を毎年持たせていただいております。宿の迎えの車に、先生ご夫妻を加え、一行一三名が車中の人となりました。

午前九時、教会を出発、一路唐津街道に出て目的地に向かいました。右側は遠く玄界灘の海原、近くに大小の島々を抱えた静かな博多湾遙に糸島富士を眺め、左はみどりのベールに被われた山肌を縫って走りました。海岸を飾る虹の松原、海岸線と松並木の調和は一幅の絵画そのものでした。

波静か　博多の海の　美しきかな

時折、先生のユーモアなガイドのお声に耳を傾け、喜びの車中でした。また、爽やかに吹く風も、博多の風、佐賀の風と環

境の違いからか、それぞれに異なり、近代都市福岡、古風な佐賀にふさわしく感じられました。田舎に育った私には幼き頃を思い出さしめました。呼子の町に入り、姉妹方の希望の声に下車して、朝市を見学しました。テレビ等で各地方の朝市を見させていただいておりますが、今朝はじめて、実感をもって朝市の風物に接しました。朝市通りのアーチをくぐりますと、狭き通りの両側に今朝漁したばかりの生魚、干魚が並べられておりました。「今晩泊まらなければナア」と思いましたが、購入は次回にゆずりました。続いて、食事処「にしき」にて昼食をいただきました。数々の珍味を以て、主のお恵みをいただき、暫く憩わしめていただきました。

つづいて、名護屋城の史跡を訪ね、豊臣秀吉の偉業を偲びました。朝鮮出兵にまつわる書簡、器物を観覧し、半島との深い係わりあいを学びました。幼き頃はすべて日本優位と覚えていましたが、どうしてどうして、日本の文化は朝鮮の文化の賜物であったことを深くおぼえました。感謝です。

中心に名護屋城を据え、周りに各地の大名の出城を配備して用意した心の大きさに、時間を越えて、感銘を受けました。その栄華を極めた秀吉も自分の人生を露と歌っております。

露とおき　露と消えにし　我が力かな

浪速のことは　夢の又夢

又、聖書にもペテロ第一、一章二四節に

ひとはみな草のごとく、その栄華はみな草の花に似ている。
草は枯れ、花は散る。

伝道の書にある通り、「空の空」であることを実感致しました。

見学を終えて、今晩の宿舎、古湯温泉清流荘に向かいました。実は、この度の旅行は、体の不自由な方々にもいと安けくと、先生はじめ愛姉の方々のお心くばりをいただき、愛の旅行でもありました。往復車で運ばれ、希望の個所個所に下車させていただき、見学させていただきました。お宿でも、又か、又かの馳走の膳でした。食事の後、祈りの時が備えられ、聖言をいただきました。ピリピ書四章一三節、「わたしを強くして下さるかたによって、何事でもすることができる。」私にとってこの聖言は何よりのお恵みでした。昨年一〇月より、体の不調を覚えておりましたが、「強くして下さる方」によって強められ、この旅行に参加することが出来ました。感謝です。祈りのあと、旅でなければ味わうことの出来ないくつろぎの中に、心を開いて語り合い、楽しい一時は感謝でした。帰途は佐賀県の産んだ偉人、大隈重信の記念館を見学させていただきました。母親の

熱心な養育を受けて大を成した人物でした。明治天皇にご進講を申し上げ、又、早稲田大学の創設者でもありました。そして教育は「学べば行え」との一言につきたそうです。一方、政治家として新しき日本の開眼に大きな働きをなさいました。

この佐賀路の旅もいよいよ終わり、上ったり、下がったりの三瀬峠を越えて、一路福岡に向かいました。一人の落伍者もなく、この旅を祝していただきましたことを主に感謝申し上げます。また愛の労をおとり下さいました先生はじめ愛姉の方々に、主のお慰めがありますように祈ります。さらに、終始安全運転して御案内賜りました運転の小父さんにもありがとう感謝致します。最後に先生のお祈りをいただきまして、この旅も終わりました。

みどりなす　山辺のいで湯に　いこわしめ
何とやすけき　神の御愛か

主によりて　供え給いし　食の膳
わびを学びて　心楽しむ

師と共に　食して交わる　テーブルに
神の御愛は　溢れ出るなり

大濠の　園に育ちし　ぶどうの木
時を刻みて　証はつきぬ

去年の春　山辺の里に　湯浴みせし
去りにし友は　如何におわすや

平成六・五・二〇

ホスピス

「よく聞きなさい。心をいれかえて幼な子のようにならなければ、天国にはいることはできないであろう。」
（マタイ一八・三）

久保田　宮　子

◆主人の姪が通っている小倉教会（小倉南区長行）に、ホスピス長の下稲葉先生の講演「死んでも生きる」があるというパンフレットを姪が持参しましたが、日曜ではあるし遠いので、お断りしていましたが、どこか心の隅で、聞いてみたい、又そ

れと日頃姪の行っている教会も見たい気持ちもありました。

よく目を通すと、午後の部一時半に間に合う様なので、礼拝後急いで帰り、食事もそこそこに飛び出しました。

◆何しろ私は出無精で方角オンチ「何時も主人の後から付いて行くばかりですので」、パンフレットをしっかり握りしめ、尋ね尋ねやっと到着しました（七分前でした）。

◆一度断っていたので姪は私の顔を見て驚きましたが、一家（子供三人）で教会の中心となって行動している姿に、涙が出る程嬉しく思いました。主人にも見せてやりたかったです。

◆何しろ初めての私なので、森上牧師御夫妻も飛んで来られ大変喜んで下さり、初対面とは思えぬ位お話が出来、嬉しく思いました。その中でも柘植先生の流れを汲む教会である事がわかりホットしました。

◆講演のすばらしさは私の様な者にはとても表わす事が出来ない位です。ホスピスは外来語で、死期の遠くない患者を受け入れ、いたずらな延命治療を用いず、病苦を和らげ、慰安の工夫をこらした施設で、ヨーロッパ中世の修道院などの旅人宿泊所が語源とか。先生は、医者であり友人でありクリスチャンであるこの三つを何時も思って患者に接しているとの事、非常に感動しました。

◆明日の事は誰もわかりませんが、この様なすばらしいホスピス病院で最後を迎え、天国に入れていただきたいとつくづく思いました。

以上

収穫（いやし主に支えられて）

緒方　とみ子

「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう。」

（マタイ一六・二五）

＊パラドックス（逆説生涯）

この言葉は、伊規須牧師の説教集（私の仕える主は生きておられる／第一四集）より教えられました。

一九九三年は、私自身、内科（肝炎）、外科（筋肉痛とけんしょう炎）、前から通院していた眼科（緑内障）と慌ただしく病と戦いました。しかし、残念ながら治りもせず、痛みはひどくなるばかり、おまけに治療費はかさむばかり、時が立つにつれて不安も募りました。主人もあきれた顔をしてましたが、時には治る見込みがあると言う情報（鍼とマッサージ）も持って来ましたが、私は一番大事な事を忘れて、それに賭けました。

裏切られて始めて、私にはいやし主（静まる事）がいた事を知りました。そして、いつも病院に行かない主人をせめていましたが、私こそ横道に逸れていたのだと、反省しました。

＊世の光・地の塩

私は今、近所のスーパーの青果部のパート（四時間勤務）をしています。猫の手も借りたい程の忙しさで、神様の愛に包まれた国で育ったのんびり屋さんには、向かないスピードです。しかし私自身、頑張ったつもりです。でもなかなか人は認めてくれません。特に、先輩達の言葉づかいはひどいものでした。やはり、忙しさも手伝っての事もあると思いますが、仲間同志の仕事上のトラブルは、いつも絶えませんでした。それに、意外と野菜も果物（箱詰め）も重いのです。

今でも忘れられませんが、その日も寒い日でした。（前日に雨が降ったのか）頭上高く積まれた「濡れたバナナ箱を壊して下さい」と、次長が言ったので、壊しにかかりましたが、思えば、トラックからバナナを下ろすのはとても重いのです。ですから、箱は当然がんじょうに出来ています。かなり積まれた箱を壊すのに、随分時間も掛かり、手も痛みましたが、その時ふとこの聖句を思い出し、（仕事がのろく、ラッピングが世界一下手と言われながらも）くじけそうになった心を強くしていただきました。

青果部には七ヶ月いましたが、この証しを書いている現在、水産部（魚屋）にいます。魚の名前も随分と覚えましたが、やはり仕事の事で批判されて、どこの場所でもおちつきません。

＊開かれた仏壇

犬を飼い始めてから本当に幸な事がどれ程あっただろうかと、先日つくづく思ったものです。それは、カナ親子を育てていた時に、同じ団地の方の苦情

・犬が二時間以上吠えたので、区長に届けた。

・我家の花壇に犬の毛が付く。

・うちの子の受験にさわるので夜なきをさせないで下さい

などで、この問題は犬好きな主人にとって大変な物でした。主人は会社を休んで、私が寝ずの番をしてまで、犬を守ろうとしたのですが、とうとう主人は、大きな勘違いをして、犬を手放す事にしました。出産後のカナは皮膚病が広がっていましたので病院にいれ、マキとマミは親犬舎の北九州市の方に売ってしまいました。伊規須先生にも、祈って随分と知恵を貸していただいたにも拘らず、私が可愛がって育てていたのも無視して——。これで終わったのではありません。更に、主人の偶像礼拝は続きますが、その事によって随分と祈り、主のみちびき

を求めましたが、神様のあわれみにも守られていると思います。

犬の親元であるY夫婦が、ある朝（自分の牝犬を山形県に送って来た帰り道に）訪ねて来ました。前日、電話で、福岡空港に行くとは聞いていましたが、まさか我家に寄るなど思っても見ませんから驚きました。

それに、いつも犬の話題ばかりで家庭の話などしないのに、珍しく家庭内の話題になりました。そしてY夫人が、自分には三人の子供がいるけれど、誰も結婚相手がいないので「緒方さん、どこか良い人いないものだろうか？」と、言いますので、私がうっかり「教会の人ならいるかも知れない」と答えました。すると「緒方さんの家はキリスト教かね。クリスチャンはよくないからやめなさい」と、意見されました。そしてY夫人の言う事は、『自分は五島出身で、親族は大のキリスト嫌いだが、子供は戸畑の天使園（カトリックの幼稚園）に行かせた。ところが、実家に帰った時に、食事前に祈って「アーメン」と言ったから、おやじさんからすごく怒られてしまった。それに、クリスチャンは仏様をおがんでいても、心の中ではいつも祈っている』と言いました。

それからが問題でした。「自分の家には大きな仏壇があり、その前を通る時に、頭を下げる人もいる」、などと自慢そうに言いました。すると負けず嫌いな主人は、Y夫婦の座っている後ろを指差して、「我家にも立派な仏壇がある」と、開かれていなかった物をわざわざ開ける事になりました。私は横にいた主人の膝をつつきました。すると、Y夫人は仏壇の横に飾ってあった龍起丸号（マキとマミの父犬）の写真が一段とよく映えると言って満足そうにして、これからは開いた方が良いと言いました。我家の仏壇は、主人の兄と姉がお参りに来る時だけ開けますが、その外はいつも閉じています。

Y夫婦が帰ってから主人と話した事は、主人曰く、「お前が言わなくても、クリスチャンだと言う事は自然に分かるものを」。私達夫婦は、性格の違いもあって、いつもこの問題で揉めます。ですから勿論、主人の兄と姉が仏様をお参りに来る時は、聖言のついた額などをはずしたり大変でしたが、近頃はそのままにしています。しかし、主人がそう言うので、隠して（宝物の箱を開ける様に）時々主人が言って居る相手がいます。それは、息子の婚約者の父親（中学の時の親友）です。私は時々おかしくなる時もありますが、神様にこの問題は任せます。そして私は、この聖言で救われます。

「主のいつくしみは絶えることがなく、そのあわれみは尽きることがない。これは朝ごとに新しく、あなたの真実は大きい。」（哀歌三・二二―二三）

以上

祈り

広田　寿

二月二四日、木曜会の午後、高木さんのところを見舞われた牧師先生に、高木さんから、みなさんにお別れの感謝をしたいからお出ていただきたい、との希望があった由連絡が届いたので、二五日午後、信徒会数人でお見舞いに出かけた。

個室に入院されていて、病室にお伺いした時、入れ違いに今まで処置しておられた看護婦さんが出て来られ、五分くらいならと念を押された。病状がよくない様子、鼻から管を通し、酸素が送り込まれていて、口にはマスクをして横になっておられ、奥様が付きっきりで看取っておられた。

高木さんは、訪問を喜ばれ、咳込み乍らも体を起こさんばかりにして一生懸命話されようとされる。一人ひとり名を呼んで感謝された。

みんなで「お導きを感謝し、平安と癒しが与えられるよう、そして、ご家族の上にお守りがありますように」と、ベッドの回りを囲んで心を合わせて祈った。

次いで、高木さんが祈られた。いつものように大きな声であった。お話される時のように咳込まれずに、力強く長く祈られた。

「今日までのお守りを主に感謝し、主に在って先生はじめ兄弟姉妹の熱い祈りと交わりを感謝し、もう、いつお召しになるか地上の残りの時間も少なくなりました。一切をゆだねます」と、平安の中に天をまち望む感謝をささげられた。最後に「前田教会と兄弟姉妹の上に祝福を」と結ばれた。

顔は輝いて見えた。一人ひとりに握手され、みんな心を残し乍ら病室を出た。面会時間五分の許可が、一二～三分も経過していた。

信仰の人、高木さんのすさまじいまでのゆるがぬ信仰姿勢を目の当りにし、感動と共に慰めと励ましを与えられて、「主は生きて居られる」と、みんなで聖名を崇めつつ帰途についた。

もう一度、もう一度ご一緒に礼拝を守らせていただきたい、と切に祈っている。

（平成六年二月二六日）

聖書味読

伊規須　泰子

◆当り前の事かも知れないけど、聖書は味わって読むべきもの、深く味わって読むべきであると感じた。

私の日々は、火曜日の朝、四時半に起きる。すぐ洗濯をする。食事の準備をする。火曜から土曜の朝は早天祈祷会が行われる。

◆先ず、五時半から六時間の間、集会室（畳敷の部屋）で座って聖書を読む。「聖書味読」と言う言葉、これはまさにさいわいな時だと思う。

◆勿論、ふだんも聖書をよく読むが、と言うことは要するに一年間で三回、創世記から黙示録までを読み通していることになる。

◆日々の時間内に、他の箇所を読む場合だって勿論ある。集会後の時など、いろいろ教えられるし、ああ、これこそ、こうなのだと、深く感激する事だって多くある。

◆味読、味わって読むと言う事について、もっと深く味わって読まねばと感じるようになった。

◆読む量にあるのではなく、読む態度にあると言うこと、注意深く読むべきこと、有益と感じる部分、（自分自身のこと?）にアンダーラインを引くことも多い。

◆時にぼんやりと読んでしまうことがある。旧約のレビ記、民数記、申命記、を読んでいると、ただばく然と読んでいることがある。同じことを繰り返し読む部分がある。――本当は同じ事の繰り返しではないのだが。やはり、とにかく聖書は味わって読むべきだと思う。

◆聖書を読むと言うことは、聖書と対話することと、何かで聞いたことがある。やはり、ぼんやりと読むのではなく、真実に味わい、読むべきだと、つくづく感じる。この場合、あの場合、おしえられることが多い。感謝だ。

以上

編集後記

『あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり……』

（ヨハネ一五・一六）

。「ぶどうの木第二一号」をお届けします。今号でも、皆さんの感謝のお証しに触れさせていただくにつけ、神様が私たちを選び、使命を与え、実を結ぶようにと立てて下さっていることを教えられます。

。主の与えて下さった多くのお恵みを共に味わわせていただきたいと思います。

（N）

発　行　一九九四年十月

発行者　北九州市八幡東区前田一－一〇－三
　　基督伝道隊八幡前田教会
　　牧師　榎本利三郎

発行所　基督伝道隊
　　八幡前田教会
　　福岡大濠公園教会
　　戸畑教会

印刷製本　有限会社　秀文社印刷